《論　文》

戦争災害による犠牲死の検証
――沖縄県渡嘉敷村住民への聴き取り調査から

麦倉　　哲[1]

要旨：
戦死・戦没者を戦災による犠牲死としてとらえる。この犠牲死は、他の自然災害と比べても、最も人為的な要因によって決定づけられた災害犠牲死である。沖縄県渡嘉敷村では、集団自決（強制集団死）とされる 332 人を含む約 600 人が、太平洋戦争を含む 15 年戦争で犠牲となった。本論では、主として住民がどのように犠牲となり、とりわけ集団自決（強制集団死）がどのように実行されたかを、筆者がこれまでに聴き取りした約 100 人のうち、筆者が比較的初期に聴き取りをした 3 人の証言に焦点を当てて検証する。渡嘉敷村渡嘉敷島における戦災犠牲死は多様であり、そこには強烈な生命の格差が存在し、戦争はすべての人々に等しく犠牲を強いたのではないことが、この 3 人の証言からも明らかになった。

キーワード：戦争災害、災害犠牲死、死の検証、集団自決（強制集団死）、生命の格差

1　問題関心

2012 年 1 月に、筆者は初めて渡嘉敷村を訪問した。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で、非常に多くの人が亡くなったことに衝撃を受け、そのことから特に「災害と死」を主題として調査研究活動を続けるようになった。東日本大震災において、岩手県大槌町で亡くなった方は関連死を含めて 1,286 人を数え、人口比にして 8.4％に及ぶものであった。この犠牲比率は岩手県内最大であり、人口の約 1 割が亡くなるというのは、非常に深刻な事態で、誰しも身近な誰かを亡くしているに等しい状況であった。そこで筆者は関係者とともに、生きた証を残す調査活動に取り組むことになった。この人々のことを記録に残し、あわせて一人ひとりの死の検証に取り組みたいと思ったのである。

戦争における死も、災害犠牲死に含まれる。戦災で最も注目される事象は犠牲死であり、その結果に及ぼした要因（原因）は究明されるべきである（麦倉 2019）。かくして、戦災犠牲死の研究も災害研究の対象に含まれる。沖縄戦を含む太平洋戦争や 15 年戦争において、沖縄県民の約 25％が犠牲になっているといわれる。渡嘉敷村での犠牲者の比率は高く、沖縄県の平均を大きく上回る人口の 4 割を超える人々が犠牲となり、その数は約 600 人に及ぶ。他方で、渡嘉敷村での犠牲死の特徴は、集団自決（強制集団死）で亡くなった人の多さである。その数は、直近の資料によれば 332 人に数えられる。これまで、渡嘉敷村における戦争と死については、村民の立場から概略としてま

[1] 岩手大学 名誉教授

とめられた記録（渡嘉敷村 発行年不詳；渡嘉敷村遺族会 1953）と、日本軍の立場から陣中日誌としてまとめられた記録（海上挺進第三戦隊 1945, 1970）とがある。両者はある程度の事実を集約したものであるが、それぞれが目的とした趣旨がベースに置かれている。そしてまた、それらは概略にとどまる。他方で、渡嘉敷村史や沖縄県資料の中で、渡嘉敷村での戦争体験が収録されていて、それぞれに記された戦争体験の記録は貴重なものとなっている。しかしながら、村民の戦争体験としては、個々の体験者の人生史のある一部にとどまるものである（沖縄県教育員会 1974, 2018）。

戦争における犠牲死は多様で、複雑である。この犠牲死一人ひとりの死の検証を進めつつ、また、原因や特性により類型化しつつ、その総体を明らかにする必要がある。しかし、これまでの複数の取り組みにより、ある程度の解明が図られつつあるが、依然として未踏の課題である面が少なくない。渡嘉敷村における、一般の住民や来住者、戦争動員者の死のうち、とくに多いのは、村外の戦地に送られた出征兵士の死と、村内にとどまった住民の死である。また、渡嘉敷村民の戦災死で特徴的なのは、集団自決による死（強制集団死）である。本土将兵、朝鮮半島から動員された軍夫（軍属）、日本軍慰安婦については一部で触れるが、ここでは主として村民および村外からの来住民等の犠牲を中心に述べたい。渡嘉敷村における集団自決（強制集団死）は、沖縄県内で最大の人数の住民が、集団で犠牲となったものである。それがどのような状況で起きたのか、その前段階である、島民の自主的な避難行動はどのようなものであったかを明らかにしたい。ニシヤマ（北山）へ避難せよ、集結せよとの命令は、家族・親族等がどのような状況で実行に移されたのかに注目したい。この命令により、集団自決（強制集団死）だけに一括できない多様な犠牲死が引き起こされたことを明らかにしたい。集団自決関連死とでも、呼ぶべきものである。

2　3人の証言に焦点を当てて、犠牲死を検証する

筆者よる聴き取りは2024年末現在も継続中で、戦災犠牲死者の全体を総合的に分析する作業も継続中である。そこで本稿では、これらのなかから3人に絞り、この3人が経験した事実に焦点を当てて考察したい。調査では、戦争体験者の戦前・戦中・戦後史をライフヒストリー的にうかがっている。その中でとくに、3月23日以降の行動や思考・実感などについて焦点を当てる。

3人とは、小嶺正雄（故人）、金城秀子、金城信子である。A小嶺正雄（以下「正雄」）は1929年生まれ（2018年に逝去）、B金城秀子（旧姓は大城、以下「秀子」）は1930年生まれ、C金城信子（旧姓は新城、以下「信子」）は1929年生まれである。3人には、3回から10回程度の面談・聴き取りをしている。渡嘉敷島や沖縄本島への訪問は30回余で、2017年9月末から半年間は、岩手大学のサバティカル制度を利用して、島に移住し、インフォーマントの3人ならびにそのご家族とは、住民同士として付き合いをした。

渡嘉敷島での連合軍（事実上は米軍）による組織的攻撃が始まったのは、1945年3月23日である。米軍の攻撃は、戦闘機による爆撃や機銃掃射からはじまり、爆弾や焼夷弾の投下、艦砲射撃、そして迫撃砲を伴う上陸作戦へと展開した。

正雄は、15歳で誕生日がくれば16歳であり、信子と同じ年であった。正雄も信子も勤労動員で軍の作業に協力していた。秀子は14歳で、誕生日がくれば15歳であった。小学校（国民学校）の高等科を卒業した年齢の男女は、女子青年団員、

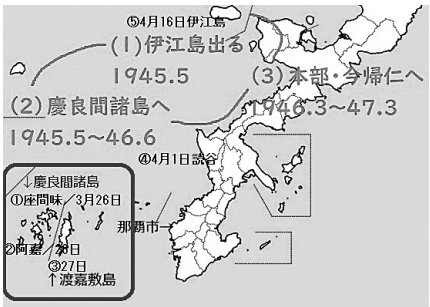

図1　沖縄戦の端緒となった慶良間・渡嘉敷島の戦闘

男子青年団員として、軍に協力していた。男子青年団は、10歳代、20歳代の青年の全加盟の集団であるが、18歳以上の男子は、徴兵や志願で出征している者が多く、島にいる青年は少ない。他方で、女子青年は戦争当時100人くらいを数えたという。

1944年9月に、住民や村の行政にとっては突然に、日本軍の基地隊および戦隊が進駐し、渡嘉敷島での基地構築を始めた。以来、渡嘉敷村は全面的に軍に協力し、軍民一体となり戦争に備えるなど、戦争の渦中に投げ込まれた。徴兵や志願の結果、男子青年や実年男性が召集や志願で島を離れた状態の中で、上の3人は、島に残された非戦闘員の立場にあったが、軍に協力することが求められた。この3人は何につけても軍に協力した。海上特攻隊の秘密基地となった渡嘉敷島は、住民の島外への移動も禁止され、軍民一体の島となった。

住民の戦死者の多くは、集団自決による。それはどのようになされたか、その当時の3人の少年への聴き取りから明らかになったのは、①ニシヤマへの集結を求める避難命令が出たことが基点であった。しかし、②集団死を仕向けたのは、それ以前からの「死して虜囚の辱めを受けず」の考えを、強力に教え込まれたことがベースにある。③その考えは、日本軍の進駐後は、米兵にとらわれたらどれほどひどい目にあうかという恐怖を植え付けられたことで強化された。そして、④それならば、その前に死ぬべきだと考えるのが普通になった。そこで、⑤防衛隊や義勇隊などの手りゅう弾の扱いのできる住民には、手りゅう弾が配付された。そして最後に、⑥ニシヤマでの自決命令と思えるような契機がつくられた。なかには、⑦具体的に集団死を命じられた人たちもいた。軍から出された自決命令がいかほどに、明確かどうかについては異論もあるが、村長の号令が契機との証言も少なくなかった。筆者の聴き取り調査の経験を集約すれば、島北部の山間地から、儀志布島方面へと注ぐカーシ川上流の谷地を見下ろす広場である「ニシヤマ（北山）」における自決命令が明白かどうかよりも、ニシヤマへの避難・集結命令が全体の方向を決定づける重要な要因であったと思われる。

3人の青年の家族・親族は、それぞれ戦時下に備えるために避難場所を作ったが、避難場所として掘削した山裾の地区はそれぞれ異にしていた。戦闘への緊迫の度が高まる事態に応じて、軍への勤労動員の合間を縫って、一家であるいは主として自分一人で、山裾の壕を掘りすすめていたのである。最初の段階では自宅の付近に防空壕を掘り、しかしそれでは不十分と分かれば山裾に横穴を掘った。それは山裾壕といえる。そして、米軍が上陸間近だとわかれば、家族によってはさらに、山林を利用して避難小屋をつくって、少しでも安心できる場所を確保しようとしたのである。

正雄は、渡嘉敷地区のガテカルのエリアに、一家が身を寄せ、非常物資を貯蔵するのに十分な山裾壕を掘った。金城（戦中は新城）信子は、正雄を同じ字渡嘉敷であるが、正雄とは別方向のキンヌカワラというエリアのムラヌマシという場所に山裾壕を掘った。いずれも、自分たち一家が耕作する畑のある場所から近いところの山裾に壕を掘ったのである。そして、その壕の奥に、食料等の生活物資を運び入れていた。金城（戦中は大城）秀子は、字阿波連の大見座山の周囲の沢沿いに一家で掘った壕に避難していた。そこは、地区の住民の畑に近い場所でもあった。

そのような中で、3月23日に、群れをなして米軍の戦闘機による爆撃や機銃掃射が始まった。その2、3日後からは艦砲射撃である。住民にとっては、それでも隠れ家となる壕があった。山裾壕に避難していることが、それぞれの一家としては最善の避難場所で、前述のように、そこには、自宅から持ち出した、貯蔵物資もあったのである。しかしながら、航空機による爆撃と艦砲射撃に引き続いて、米軍の上陸作戦が始まると、日本軍は島の渡嘉志久の本部陣地から撤退して、村民である防衛隊の参謀の知恵を借りて、赤間山の影となる谷地に新本部を構築し始めた。そこは、慶良間諸島の北西部に船団を構える米軍による艦砲攻撃をしのぐ影地に位置する絶好の隠れ場であった。軍は村民の知恵を借りても最も安全な場所に陣取ったといえる。その一方で、島の全住民に対しては、米軍の艦砲攻撃や戦闘機の爆撃も受けやすいニシヤマのカーシ川上流の谷地へ集結するようにとの命令を下したのである。

図 2　住民が避難していた防空壕と
ニシヤマ（北山）への避難の行程：字渡嘉敷

その場所は、谷地ではあるものの、大きな山の影地でもない、島の北岸に注ぐ河口であるカーシガーラの上流にあたるカーシ川沿いの谷地である。この避難命令は、島の地理的な条件を考えれば、住民を安全な場所に避難させるという理由に背く、米軍船団の攻撃を受けやすい最も危険な命令であったのである。軍民一体となった島では、島民にとっては日本軍の命令が絶対であり、ニシヤマへの集結命令は、島民全体を危険にさらす、犠牲を引き起こす重大な決定であったのである。

3　小嶺正雄の証言

3.1 正雄の人生史の概要

正雄と筆者が、最初に合ったのは、2012 年 1 月である。筆者の聴き取りに最初に応じてくれたのが正雄さん（以下、敬称略）で、当時は 82 歳であった。部屋には人命救助の感謝状が飾られていた。監視員として海の安全を浜から監視をしている時に、海難事故でおぼれかかった青年をみつけ人命救助したということで、表彰状が授与されたのであった。正雄の人命救助の話は、正雄の人生史のなかでは、その場でうかがう聴き取りと、どこかでつながっているのではないかと思われた。夏に海で監視活動していたのは、青年の家（青年の家、現青少年交流センター）に勤務していたからである。22 年間勤務した後に、正雄はセンターを定年退職している。集団自決や戦争体験のことについて証言し始めたのは、退職後の 1990 年代からである。公務員的な職業の立場にあった定年前の時期には、戦争体験の証言を控えようという自制が働いたのだという。しかし、10 歳代の少年期に経験した島での戦争のことを忘れることは、決してなかったのである。

戦前・戦中の時代に正雄は、軍国少年であったと自身を振り返る。それはなぜだろうかと自身で考えてみると、自分のように父を失った者にとっては、恵まれた生活環境にある者が学歴を積んで立身出世していくのとは違って、軍隊の中でこそ栄達できると考えたのである。少年時代に軍隊にあこがれたのは、自分の家庭の事情も作用している。正雄の家族は父と母に姉であったが、父は南洋の製糖工場に出稼ぎに行き事故で命を落とすことになる。正雄の家系は唐との貿易で潤い、家の周囲は石垣で覆われ、骨とう品も収蔵する豊かな家であったという。しかし、父親の没後は母子生活で、姉がいたものの男の働き手は自分だけなので、一家を支える使命感から、国民学校高等科を

卒業した後は、かつお船の乗組員になった。かくして、正雄自身の向学心や功名心の中に、軍国主義が浸透していく。戦時中のことを語りだした正雄は、その当時は軍国主義に洗脳されていたと、自身の過去を振り返った。忠君愛国を唱えたという。

3月23日に米軍が慶良間諸島に進軍したのは、日本軍にとっては、予想外のことであった。沖縄戦を振り返ると、しばしば米軍は日本軍の想定に反するように進軍した。慶良間諸島への上陸作戦は第一に空襲で、航空機からの爆弾投下と機銃掃射である。次に、艦隊からの艦砲射撃、そして、いよいよ上陸となる。3月27日までに正雄は、ガテカルのエリアに家族が避難できるくらいの防空壕としての山裾壕を掘った。そして、非常物資なども貯蔵していた。しかしながら、27日になって米軍の上陸作戦が始まると、住民への避難命令が軍から出された。自分の一家は、山裾の避難壕にいたほうがよいと思ったものの、住民全員に対して避難するようにとの命令が出されては、このまま避難壕にとどまることはできない。自分たちが避難する住民から取り残されて、上陸した敵からの攻撃を受けることの不安もあったので、地区の住民たちの避難ルートに従って、自分たちの家族や親族らと一緒にニシヤマへの避難行動をとった。

正雄少年は、沖縄戦当時にまだ15、6歳なので、手りゅう弾を渡されなかった。しかし、集合場所にむかう途中で、誰かが落した手りゅう弾を拾って手に入れていた。27日の夜に集合がかけられ谷に沿って山を登り、それから明けて28日になると、人々が集まった場所は、異様な雰囲気に包まれた。家族、親族が車座になって、自爆する流れになった。しかし、正雄の手りゅう弾は爆裂しなかった。

そのあと、米軍からの迫撃砲のような爆弾が炸裂して、おどろいてその場から逃れ、沢を下った。正気に返った正雄少年は、海岸に出て海を泳いで、目の前の島（儀志布島）へ逃れようとした。しかし、海を渡る途中は崖でそれ以上進めなかった。沢を降りてみると、おびただしい数の死体や死にかけた人や、大怪我をした人であふれ、すさまじい光景であった。手りゅう弾で集団死したり、生き残った者は年配男性や防衛隊が手にかけて殺したりした結果である。正雄はその場から逃れたくて、日本軍の壕の方向に逃れたが、助けてくれると思った日本軍は、反対に住民に銃を向けて来るなと発砲した。そのため、そこからも逃れて、行き場を探したところ、そこは、第二の集団自決の場所（玉砕場）であった。

日本軍が配置されていなければ、あるいはまた配置された戦隊の特攻艇が予定のとおり出撃していれば、332（以前は329人や30人であった）人もの住民は自決しなかった。またその後、投降を呼びかけたりした住民や・伊江島島民が、処刑や虐殺などされることはなかった。

3.2 避難命令の前
――村民は自主的に避難していた

たいていの村民は自主的に避難していた。軍のための壕堀りに動員され、軍作業に従事していたものの、正雄も自分たちの家族のために避難壕を掘っていた。それゆえ村民は、それぞれにどこに避難するかを決めて、身を守る備えをしていたのである。正雄も家族のために、一家の安全を確保するための壕づくりに必死に取り組んでいたのである。しかしながら、そうした状況の中で、避難命令が出された。避難命令が出る前は、自宅の住宅ではなく、そこから離れたところの自分たちの畑があるガテカルの山裾の壕にいた。そこへ避難命令が下され、命令が伝達されて、家族、親族と一緒にニシヤマへ行くことになったのである。

正雄の証言①　家族で避難していた

正雄　「だから（家のある集落とは）反対側の（ガテカルの）棚田に」
正雄「避難して」
正雄「防空壕に」
筆者「にいて、避難していた」
正雄「避難していた」
正雄「ちょうどわれわれが家族を守るために、防空壕、掘ったですよ」
筆者「（しかし、避難命令が出されたことで）えーそのニシヤマの方に」
正雄「私たちはここに残っとったら取り残され

て大変だから」

3.3 避難命令が出されて――避難路は

避難路は山や谷の道で、米軍の焼夷弾によって焼け野原となり火もくすぶっていた。攻撃を受けないように、少しでも安全にと思って、川沿い・谷沿いを登っていくので、また雨中の移動は困難を極め、体力の衰えたお年寄りには過酷を極めた。正雄らは、率先して登る村長ら幹部らを一団とする歩みよりもかなり後方にいて登る順は遅かったようだ。それでも、みなが終結する場所にたどり着いた。

正雄の証言②　周囲の段々畑は焼け野原

筆者「雨がすごかったですね」
正雄「はい。向うに渡って。こっちはもう焼けの原。山も焼けて」
筆者「夜中から」
正雄「はい、夜が明けるまで、したらもう村民が全部集まってきているもんですからね」
筆者「集まってきている。で、この村長さんとか軍の人とか警察の人とかそういう人もいた」
正雄「はい。もう行政の立場やっている人たちが中心になって」

3.4 第一の玉砕場で――玉砕場で自決、家族・親族らを死なせる人々、その途中で逃げた

一家・親族で車座となっていた正雄の一団は、手りゅう弾を爆裂させようとした。その契機となったのは、村長による「天皇陛下万歳」の唱和である。もともと、捕虜になってはいけないとの国家的な思想教育があり、軍が駐留してからも、渡された手りゅう弾は最後には、自決のために使用するものと教え込まれていた。

正雄の証言③　天皇万歳

天皇陛下万歳というのが契機になったのかとうかがう。

筆者「万歳というのはあったんですか」
正雄「はい」
筆者「村長自ら」
正雄「天皇陛下万歳って」
筆者「天皇陛下万歳を」
正雄「はい」
筆者「万歳三唱して」
正雄「はい」
筆者「その後家族や一同で」
正雄「それで」
筆者「手りゅう弾を持っているのは、えー防衛隊の人でしょう」
正雄「はい。それから、扱いきれる者はほとんどやって（渡されて）いますからね」
筆者「小嶺さんはえーと」
正雄「私も」

正雄の証言④　手りゅう弾

正雄も手りゅう弾を持っていたのか。渡されたのか。

筆者「小嶺さんも1個、2個持っていたんですか」
正雄「はい」
筆者「1個？」
正雄「これは後ろの山からですね、防空壕からは出て、山を越えて、裏の方に避難していたんですよ。で、防衛隊が落としたのか知らんけど、落ちているのを拾ったんですよね。2発拾って、ポケットに入れて。いざという時にやろうなって。して、玉砕場まで持って行って」
筆者「それはいざという時は敵に投げようと思ったの、それとも、玉砕しなければいけないと思ったの」
正雄「はい」
筆者「玉砕しなければいけいない」
正雄「自分で身をあれなければできない（玉砕できない）時にはこれを利用しようとして」
……
筆者「グループごとに、家族ごとに手りゅう弾が爆発しているような状況になって。自

分もそれで信管を抜いた」
正雄「はい」

手りゅう弾は爆裂せずに、生き延びたことが転機となったが、その後も、第一の玉砕場では、死に急ぐ人々が続いた。手りゅう弾をもっていない一族では、刃物を使い、棒を使いと、この流れで自分たちも死ななければという大きな流れができていた。その中で、正雄は、この場から脱したいと思うようになった。自分自身で自害することができない、子ども、女性、高齢者が次々と死なされていくと、少年でもあった自分もやがてその番になる（殺される）と察知したのである。死ななければと思う反面、このみじめさから脱したい、逃げ出したいと思うようになったという正雄少年であった。

3.5 第二の玉砕場で

正雄の証言⑤　第二の玉砕場で

第一の玉砕場の悲惨な状況を目の当たりにした正雄と一家はそこから移動した。

正雄「色々もうあの時は。本当にみじめな。なんでこうならなければできないかねえちゅうて。逃げられないならどっかに逃げようちゅうて考えていたけど、なかなかできないで。これよりは、第二の玉砕場ちゅうところが怖かったんですよ」
筆者「その後、えーと家族で第二の玉砕場に移動した」
正雄「移動して、ほとんど、ほとんどですね」
筆者「刀や棒等で」
正雄「ええ」
筆者「あのー殺し合うような、大変なことになったわけですね」
正雄「はい。同じ島の人の（手によって）、私もやがて殺されるっちゅうて。もう逃げて、殺されないように、自分の身を案じてやったん（逃げたん）ですよね」

第二の玉砕場、つまり、別の場所に移動している人たちがいるというので、そちらのほうへ移動した。赤松隊の新本部前には、そこになだれ込む人々でごった返していて、死にきれなかった人は死を求めて、そしてまた生き延びたい人は軍の救いを求めてくる人などが入り混じっていた。そこで、緊迫した本部では、軍が銃剣を住民に向けて寄るなと命じた。そして、第一の玉砕場とは別の方向へ進めとの命令が出された。その混乱を鎮圧しようとした軍によって、銃は発砲され、手りゅう弾は爆裂し兵士の中にも犠牲者が出て、また大騒ぎした防衛隊員でもある村民は斬り殺された。

第二の玉砕場では、自決をうながされて自決をする人たちもいたが、米軍の艦砲や迫撃砲のほか、日本軍の陣地からの擲弾筒が発射された。住民は自決し、敵からの攻撃で戦死するでもなく、日本軍から組織的に殺害されたのである。

正雄の証言⑥　第二の玉砕場へ

日本軍陣地では、住民を寄せ付けず、別の場所に行くようにと、具体的な場所が指示された。そこが第二の玉砕場である。

筆者「ここ（軍の新本部付近）を通るなと（軍が）言ったので、ここを通らないで、それ以外の所に住民が」
正雄「そして、第二の玉砕場ちゅうてですね。こっちからまた別の所に移動させられて。ここでまた殺し合い、えー、この弾がですね」
……
正雄「ええ。その翌日（3月28日）ですよ、第二の玉砕場にまた、こっちからは、あのー、わ、日本の陣地だからここには居れないから、別に移動しなさいちゅうて言われたもんだから、移動して」
……
筆者「……で、別の陣地に移動して。じゃあ生き残った人はみんなでまた移動して」
正雄「はいはい、移動して」
筆者「向うで何かしなさいというような意味ですよね、（移動した）後で」
正雄「はいはい。して、食事はないしですね、こっちでは。第二の玉砕場で。まあ大変だったですよ。木の実を拾ってですね、

ようやく食べて」
筆者「で」
正雄「そうしてから、こっからですね、各自の前の避難場所、ずっと最初作った避難場所。で、色々食料とか何とか隠してあるのを探し出して持ってって、またこの野宿している人にあげてですね」
筆者「正雄さんが」
正雄「はい」
筆者「一人で食料を取りに行って、また戻って」

3.6 第二の玉砕場での弾は日本軍から

第二の玉砕場では、米軍の艦砲や迫撃砲ではなく（あるいは米軍の艦砲や迫撃砲ばかりではなく）、日本軍の擲弾筒が発射されたという。正雄は迫撃砲と述べるが、日本軍が有していたのは擲弾筒である。

正雄の証言⑦　迫撃砲はどこから、擲弾筒は

正雄「迫撃砲（＝擲弾筒：筆者）で。あの時は。そうだね、この弾は私の友達がですね（目撃していて）」
筆者「はい」
正雄「この辺から、日本の陣地から、親と別れてうろついて歩く時に見たら、日本の兵隊がここに陣地を構えていたらしいんです」
筆者「うんうんうん」
正雄「で、私にですね」
筆者「はい」
正雄「兄貴、あの、この弾（たま）はどっから来た弾か分かるかね。……迫撃砲（＝擲弾筒：筆者）を日本軍から撃ち込まれてですね。相当亡くなったんですよ」
筆者「日本軍が。じゃなくて」
正雄「部落民が（亡くなった）」
筆者「部落民が」
正雄「はい」
筆者「ここに集結していた人（住民）」
正雄「はいはい」
筆者「はいはいはい。そうですね。はい。ここで玉砕に」
正雄「これはね」
筆者「（第一の玉砕場で生き）残っていた人たちも亡くなった」
正雄「はい」
筆者「爆破して」
正雄「これは（攻撃したのは）赤松隊の兵隊の陣地がここに、迫撃砲（＝擲弾筒：筆者）陣地があった弾であるわけですよ、日本の弾、弾だったようちゅうて」

3.7 一連の行動の中でおばあちゃんは亡くなった

そして、数日にもわたる恐怖の彷徨の果てに、祖母は絶命したのである。祖母は、手りゅう弾によって亡くなったのではなく、迫撃砲や擲弾筒によって亡くなったのでもなく、避難命令による彷徨の末に亡くなったのである。悪天候の中を、昼夜を問わずに山に登り、移動し、水や食料の環境も、安静な環境もなかった。要するに、住民が手にかけた集団死でもない、集団自決（強制集団死）の関連死である。戦闘という状態自体が通常ではないが、そうした状況での避難命令というのは、住民がそれでも地域の生存諸条件の中で耐え忍び、避難生活をする諸条件を放棄せよという命令に等しく自衛による安全の条件を破壊したのである。若干15歳（16歳）の正雄少年は、おばあさんの亡骸を、命を落としたその地に埋めることが、その場で最大限にできた弔いであった。

沖縄戦が実際に始まる前までは、軍民一体となって戦争の備えをして、住民はこぞって軍に協力してきた。しかし、沖縄戦が始まってみると、戦闘継続の足手まといになる住民は率先して死ぬように求められた。それが戦争への協力であった。戦闘が始まる前の、まだしも平和な時代とは対極のありさまがこの島を覆ったのである。

正雄の証言⑧　友達も亡くなった

渡嘉敷島の戦争中では、同級生の友人も犠牲となった。

筆者「その友達は何さん。もう亡くなっていま

すか」
正雄「はい」
筆者「はーそうですか、はー。じゃあもうこの足手まといになるような住民はみんな死んで欲しいと思っていた」
正雄「そう」
筆者「まあ途中まで、平和な時代は住民と」
正雄「はい」
筆者「仲良くやっていたけれども、みんな兵隊にも憧れていたけれども、いざ戦争になってみるともう近寄るなって」
正雄「そうです。そうですね。これだけ（の数の）人間（を）生かしとったら食べるの、飯がない」
筆者「なくなる」
正雄「食料もなくなるから、少なくしようちゅうような、作戦だったかもしれない」
……
正雄「もう死体も整理して。各自また自分らの防空壕に逃げて来たんですよ」
筆者「逃げて来た。じゃあ、小嶺さんはお母さんと妹（姉：筆者）さん」
正雄「はい」
筆者「おばあさんを連れて」
……
筆者「その時に一緒に」
正雄「そうするうちにね、おばあさんはあのー戦病死で亡くなっていた」

亡くなったおばあさんを畑に埋葬し、ここにおばあさんが眠っていることがわかるように目印をつけて、畑に埋葬した。避難命令がなければ、自分たちの避難所にいれば、食料もあったのである。

正雄の証言⑨　おばあちゃんも亡くなった

正雄「鰹節もあるし」
筆者「ああ鰹節もあります」
正雄「色々お米もある程度はあるし、あったから」
筆者「で、おばあさんももう、ここを（ここから）逃げたり、この惨劇の中に置かれたりして、もう疲弊して」
正雄「で、ここで」
筆者「亡くなったわけですね」
正雄「亡くなったから、葬式してですね。畑に埋めて」
筆者「もう亡くなったのは翌日ぐらいですか」
正雄「そうですね」
筆者「畑に埋めて」
正雄「畑に」

3.8 遭遇した多様な死

集団自決以外の死の中に、日本軍による処刑があり、そのほか正雄さんが目撃した戦争における犠牲の数々がある（麦倉 2020, 2022）。まず、日本軍における処刑があった。正雄と同級生の金城幸太郎は、日本軍によりスパイとして断罪されて処刑された。連行される幸太郎と正雄は山中の道ですれ違った。幸太郎は正雄に、さよならとの意味を込めて目立たぬように小さく手を振ったという。このほかにも、朝鮮人軍夫の処刑があり、そして兵士による兵士の殺害も起こった（麦倉 2021）。

3.8.1　金城幸太郎の処刑

正雄の証言⑩　友達も亡くなった

筆者「はい」
正雄「阿波連の方でとっ捕まえられて渡嘉敷の方に連れてこられて、私と手を振って、さよならちゅうて、手を振って」
筆者「幸太郎さん、おいくつでしたか」
……
正雄「同級生」
筆者「同級生。で、その反逆罪で」
正雄「そう、そうですね」
筆者「処刑されたわけですね」
正雄「はい」
筆者「大変不幸な」
正雄「捕虜になっているからちゅうてね（米軍の捕虜になっているのにそこから出てきたことでスパイとされて）、日本の兵隊に。あのー嫌がられて、とっ捕まえられて、本部の方に連れていかれた。銃殺（斬殺＝筆者）されたんです」

実際の処刑方法を正雄は見ていない。筆者が聞いた他の証言では、軍の処刑場で、斬殺されたというのが事実と思われる。一度捕虜にした村民をいまだ戦闘中の島に戻し、安全な保護管理を怠った米軍の責任も重大である。

3.8.2　朝鮮人軍夫（軍属）の処刑

朝鮮人軍夫が処刑されたのも軍による殺人である。

正雄の証言⑪　朝鮮人軍夫も亡くなった

朝鮮人軍夫の処刑の背景には、朝鮮人への強烈な差別がうかがえるのである。

正雄「（朝鮮人軍夫は）壕掘り、壕掘りとかですね。こき使われているような（＝状態）だったです」
筆者「ですよね。その時に（秘匿壕を掘ったり、新本部壕を掘ったりする時に）用事をいいつけられるけれども、この本部の防空壕には一緒にいないわけですね」

3.8.3　日本軍同士の殺害

敗戦で投降となる直前、住民は貯蔵しておいた最後の食料を（親類らの）一族で食べようとしていたところ、日本兵があらわれご飯を奪われた。その若い兵隊は、以前から住民からは、おとなしくてよい印象を持たれていた兵隊であった。しかし、敗戦が明らかになった時点で、最後の手段に出たのであろう。住民から飯を奪い、その足で上官を殺害した。この青年兵士は、上官からひどい仕打ちを受けていたのであろう。上官を殺害した後にこの青年兵士は、捕虜になるなとのことわりを遵守して自害した。赤松隊は、「陣中日誌」においてこの兵士の死について行方不明と記してあいまいにした。その影響で、遺族には戦死公報が届かなかったらしい。戦死ではない死とされたのであるが、これも戦争関連死であるに違いない。

正雄の証言⑫　日本兵同士の殺害

筆者「……ウフバタキ（というところで親族）で食事をしていた？」
正雄「食事をしていた」
……
筆者「食べて（いたものを）」
正雄「（兵隊に）奪われたんです」
筆者「で、奪われて」
正雄「何事もなく。で、年寄りの連中があーくれないと（あげないと）、すぐ、（その兵隊は）いま拳銃持っているから、拳銃で（私たちが）撃たれるよう、命はなくなるよ。あげなさい、あげなさい。で、あげて」
筆者「で、あげて。で」
正雄「で、この兵隊がちょうしんへい（通信兵）だったらしい」
筆者「ちょうしんへい？」
正雄「（この）ちょうしん（通信）兵の家族も（戦後になって）、いっぺんはあのー後かたを捜索しに来たら、（それというのも）戦死広報も出ていなかった（というの）ですよ」
……
筆者「アリガーの道から」
正雄「あのー分隊、分隊長だった人が、この人に、あのー拳銃で撃たれて亡くなって。すぐ道のそばに、ですね、穴を掘って埋められて」
筆者「アリガーヌワラの所で」
正雄「はい。降りる所に」
筆者「ここ、分隊長に殺されたんですか」
正雄「ころ（殺されて）」
筆者「この逃亡兵は」
正雄「逃亡兵に撃たれて」

4　金城秀子への聴き取りから

金城秀子（旧姓は大城、以下「秀子」）は、米軍の組織的な攻撃が始まった時には、字阿波連の山林に避難していた。秀子の旧姓は大城で、そのいちばん上の兄は大城良平で、島の防衛隊の副隊長であった。3月27日、米軍の上陸作戦が開始されたとの状況に至って、日本軍はニシヤマへの避難命令を住民に出した。27日の夕飯を山林の避難場所でとろうとしていた時刻に、字阿波連に

は、安里巡査がやってきて、軍の命令を伝達した。夕食をとってからというような時間の猶予もなく、ただちに避難行動を取るようにと急告したのである。これを受けて、まず、地区長をしていた金城清治の一家は、避難行動を開始した。

秀子によると、島にいた比較的若い中年の男性であるお父さんの年齢世代が防衛隊にとられていたので、さらに年配のおじいたちが引率する形で避難することになった。秀子たちはそれに従って、ついていくしかない。一行には、幼い子や乳飲み子、足の不自由な高齢者（今でいう要介護者）も含まれていた。中には、行くのを断念して、世話をする人もいなくなり、いのちを落とした人もいる。

秀子を含む親戚一同は、村の助役である宮平栄一らと一緒であった。しかし、この一行には、母や姉におぶされた幼子や、歩みの遅い高齢者も含まれていたために、率先してニシヤマへと向かった比較的健脚な一群とは違い、徐々に遅れてその差が広がり、相当に遅い進行状況となった。筆者が、これまでに聴き取った証言者の話を総合すると、字阿波連からニシヤマへと向かった住民群は、大きく分けて3群に分かれた。歩みの早い群と、遅い群と、両者の中間ですこし違ったルートで山を登った群の3群である。

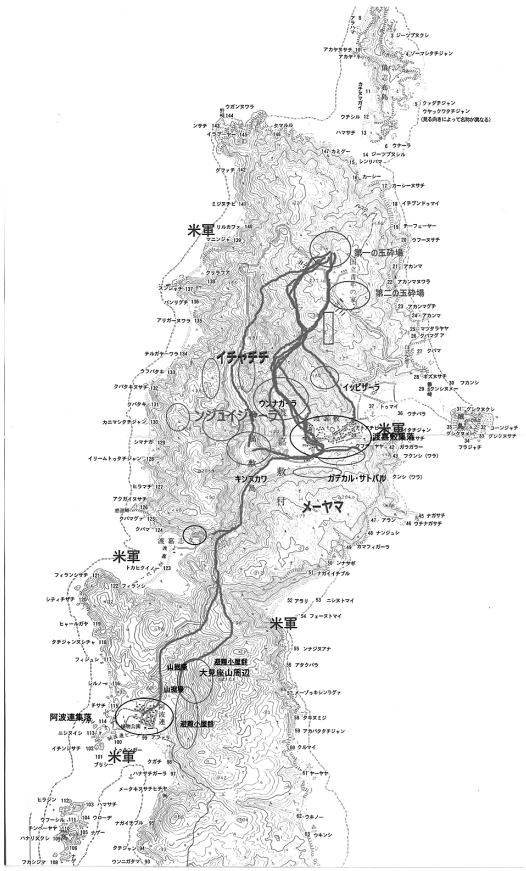

図3　住民の避難経路：字阿波連から

字阿波連から字渡嘉敷の方面へと歩み、その途中にある渡嘉敷の水源地であるウンナガーラを経由して沢沿いに山を登り、途中から尾根をこえて、渡嘉敷港へと注ぐイッピ川の沢沿いへと移行し、そこからさらに赤間山を目指す。そこで赤間山を奥側に回り込むか、それとも山の手前を回り込むかの2方向に分かれるがその2ルートのいずれかを経由して、目的地のカーシガーラの上流の谷地に到達する。

字阿波連から字渡嘉敷へと向かう中間は危険な隘路となっている。この渡嘉志久地区を通過する尾根伝いの道はルートが限られるため、ここが両軍の攻防の要となっていたのである。26日に、座間味島に上陸した米軍は、翌27日に座間味島に面していて、比較的浅瀬の浜が広がる渡嘉志久地区の浜から上陸を開始したのである。そのため、阿波連地区の住民は、阿波連と渡嘉敷とを結ぶ渡嘉志久地区のメインの道からはずれて、東側の林道を通って渡嘉敷地区のほうに進んでいくことにしたのである。こうしたエリアの歩みなどを辿ってみても、移動を命じられた阿波連地区の住民にとっては恐怖の行程であることが分かる。かくして、歩みの比較的早い区長の一行と、ゆるやかな歩みの助役の一行では、そのスピードに大きな開きがでた。そして、その間のグループもあった。助役は、遅れそうな人たちに配慮しつつ、また、途中の川沿いの谷地で転落した老婆を救出したりなどして、進んだのである。

4.1 避難命令が出されて

命令が出される前は、字阿波連の住民も、一家・一族ごとに避難場所を作っていた。そうした自主避難の最中に、軍の命を受けた安里巡査の厳しい勧告が告げられた。それがニシヤマ（北山）

への避難の契機であった。島の南方に位置する字阿波連の住民にとって、島の北端の最高峰の山の方へ集結せよというのは、故郷を追われた彷徨と呼ぶべきものである。乳児や幼児を含む子どもや女性も、出産間近の妊婦も、いまでいう要介護の年寄りたちにも、一律の命令として下ったのである。このことは、それ自体が生命の維持を放棄させるものであり、要保護者や要援護者にとっては、保護環境のはく奪による死の宣告と言ってよいものである。

秀子の証言①　避難することになった

筆者「行きなさいってのは言われたのは？」
秀子「これは、もう、自分たちの、先輩のお爺ちゃんたちが」
筆者「お爺ちゃんたちが」
秀子「うん」
筆者「それは防衛隊に入っていた人たち」
秀子「みーんな（その人たちは）防衛隊にいって（とられて）いるから。あのー、もう、5、60代の。あ、6、70代の人たちが」
……
秀子「うん、その先輩（たちが）」
筆者「米軍に攻撃されないようにとって（といって）行った（向かった）」
秀子「その人たちが連れて、あのー、山を（途中の山道を）分かる人たち。だから（私たちは）、連れて行かれて、川の底に降りて行ったら（川の谷地を通って行く途中に）、ここに（字渡嘉敷の人たちが作った）防空壕が一つあるからということで、降りたけど。この防空壕に（は）入れないから、（途中で休むわけにもいかず）自分たちは一人も、みんな、こ、子連れじゃない人たちは、また、上がって行ったわけ、上に」

4.2 避難する恐怖

夜間の未踏の山谷の道を移動するのは、秀子ら物心のつく少女にとっても尋常ならぬ恐怖があった。戦闘が始まり、爆撃、機銃、艦砲砲撃などを経験しつつ、そのうえで米軍の上陸作戦が開始され、迫撃砲は発射され、弾が飛び交っているさなかの移動である。秀子は心身ともに恐怖の渦中にあった。

秀子の証言②　避難する恐怖

秀子「ここを逃げるために、もう、こっちから、米軍が上がってきたらみんな全滅だから（という恐怖で）逃げるというために逃げて行って。あのー渡嘉敷の山の方へ行った（向かった）んですよ。したら、自分たちは、あのー、お姉さんが（お姉さんの）子どもが小さかった、赤ちゃんだった。赤ちゃんといた（と一緒だった）から。でもー、こんな小さい子ども持ちだから、あのー、前の人にはついていけないから、子持ちは後になったわけ。川に降りてから。して（それから）、独身の、自分たちみたいな、生徒ぐらいの人たち、（年配の）お父さんお母さんに連れられてみんな山に上がったわけ、避難に（するために）。したら、自分たちは（自分たちのグループは）もう行けなくなって、ここでとまっていたら、（先行して行ったグループの）あの人たちは翌日なったら、玉砕した。で、自分たちはもう喉も乾くし、水も欲しいから、みんな夜は、もうこっちから（こっちでは）、食べ物は食べてないから、水（も欲しい）、喉乾く。もう、川に来たから、水をみんな大きな葉っぱで汲んで来て、もう飲まされて飲む。翌日になったら、人の血だけ（血にまみれた）だった。血が。あっちこっち、もう、人が玉に当たって、死んで、川の上は」

4.3 途中が危険

秀子らにとって、そもそも行く途中が怖かった。島の北部に行くには、戦闘苛烈な経路を通過しなければならない。隘路となっている渡嘉志久地区を経由しないと、ニシヤマ（北山）へは行けないという恐怖である。

秀子の証言③　避難する恐怖

秀子「軍の、兵隊さんがいるから。（渡嘉志久地区の）この辺全部あの、すーてい（しゅうてい＝舟艇）、一人持ちの、すーてい（が配備された場所）。こっち山だったんですよ、でも、こっちなんかも、あのー必死でした、山。ここに（攻撃される危険な道を通って）避難しているもんだから。日本は（基地にしたので）、これ、弾（たま）が（撃たれるから）」

筆者「そうですよねえ」

秀子「ええ、もう怖かった。逃げて（ニシヤマへ避難して）行く途中は、また、あのー、あっちにも陣地作っているから、陣地から（も敵からも）、あのー弾が送られる（放たれる）」

4.4 第一の玉砕に間に合わなかった

秀子らのグループは、その歩みの遅さから、第一の玉砕場にたどり着かなかった。第一の集団自決の場に遭遇していないのである。そして、このことが意図的であるかのように、赤松隊から弾劾されて、グループを率いた村の助役宮平栄一は袋叩きにあい、手りゅう弾を持たされて、第二の玉砕場での自決の決行を命じられた。この事実は秀子の証言からは出てこない。別の書で論述する内容の一部である。軍と助役とのやり取りの内実を、秀子は見聞きしていないと思われる。玉砕場にたどり着かなかった様子を、秀子は次のように述べる。

秀子の証言④　たどり着かなかった

秀子「したら、自分たちは、また子ども連れしている人たちは（ニシヤマのほうにさらに）上がろうとしたら、うん、もう、防空壕（があって）、これから、上がれ（といって進んで行って）、（しかし、その途中でこの先は）入れないから、この辺、この辺までって止められたんですよ」

筆者「ああ」

秀子「向う、玉砕場だから。して、こっちから下は、ここに止まれということで、自分たちの（後発の）阿波連グループの半分は止まって、早くから行った人たちが玉砕場行って、それで（玉砕した）」

筆者「山の上の方に」

4.5 そこを避難して、彷徨して、生きた心地がしなかった

自決を命じられた助役のグループは決行を意図し、また何度もためらいして、時間と向き合っていた。そうした経過の果てに、助役らの決死の覚悟で、玉砕場から離れ、自決せずに避難し、沢を下って休息をとった。のどが渇いて、大人たちが水を運んできてくれた。なんの器もないので、葉っぱで。しかし、その水は、翌朝見ると、赤い色をしていた。玉砕場から流れてきた血が混じっていたのである。秀子は生きているとはいえ、生きているとも分からない状況であった。

秀子の証言⑤　生きた心地がない

調査員「幼いお子さんとかは風邪とかこじらせて」

秀子「こんな関係も全然分からん。みんな息するだけは生きてるとしか考えない。雨も（降って）びしょ濡れで、濡れても着替えがなくて、つけたまま」

調査員「風が吹けば島は寒いですもんねえ」

秀子「こんな、寒いとも、暑いとも、全然考えない。もう、やっぱり、死んだ人と一緒、もう何にも分かんない」

筆者「息してるか」

調査員「極限の状態」

秀子「おなかすいてもすいたとも思わんし、食べたいとも思わんし。もう子どもはおなかすくと泣くでしょう。お母さんがおっぱい飲ませても、入れないし。うん。恐かった、これはもう、もう。怖いのを過ぎて、何とも感じなかった。それでも、わちら、また、捕虜（となった字の人）が、捕虜しに（捕虜になるように迎えに）来た時には、もう、みんな仕方ないから、もう何（どうにでもなれ）」

筆者「終戦の時ですか。何月頃、山を降りた時というのは」

まだまだ渡嘉敷島では終戦とはならない5月から7月までの頃であった。

4.6 生き延びれる場所を求めて、そして玉砕の様子を聞いた

話は前後するが、玉砕からしばらく経過した頃のことである。赤い水を飲んだ、食料もないところ（おそらくカーシガーラと思われる）から、一行はウンナガーラ山のほうへ向かう。ウンナガーラの山の方向に位置する茶園畑で滞在したものの、そこでの食料調達も困難に至った。そこで一行は、意を決して、字阿波連へと戻ることにした。茶園畑にいる時には、玉砕場を経験した字阿波連の人々も集結してきた。そこで秀子は、第一の玉砕場での惨劇を経験して生き残ったおばあさんから、その壮絶な模様の話をきいた。絶望に近い話を聞いた秀子は、自分自身も生きている心地がしなかった。

秀子の証言⑥　玉砕場の様子を聞いた

秀子「行った人は（集合場所には）防空壕も何もなかったみたい。して」

筆者「夜が明けたら（実際は午後3時くらい）、玉砕が始まって」

秀子「みんな玉砕、玉砕しようということで。もう今（米軍が）上陸（して）、渡嘉志久に一杯来てるから。あっちは渡嘉志久の人が、山の上から見えるところが、渡嘉志久だから。こっちから（島の北側からも米軍が）、今上がって来るから、もう早く（決行しろ）ってから。あれ、戦争は若い人たちは早く死なないと引っ張られる、連れて行かれる（からという恐怖で）」

……

筆者「それ、親戚の娘さんも（死なされるために）殴られた」

秀子「殴られた。（親戚の子が）二つ三つ、2歳、3歳の時によ。殴られて、こっち、こんなに、あのー、傷ついたきたわけ。棒で。どうしたったらよお。どこの親父が棒で叩かれた、叩いたよーって。（戦後、そのおじいに棒で叩かれたと言っていた）（叩かれた子の記録から誰から）やられたーって、分かるわけ」

……

筆者「とにかく、玉砕しなければいけない（ということで）、みんな、ね、もう生きていてもしょうがないと」

秀子「親戚だから、殺してちょうだいって、みんな言ったっていうの。親戚しだいで（同士で）殺したって」

筆者「本当に、そういう大変なねえ。でも、その2、3歳でも、大怪我したけど、生き残ったわけね」

秀子「生き残ってきて、もう、傷だらけだけど。大きい怪我がこっちにあって。うん。もう、嫁にもいけないさーって言ってたけど。……」

4.7〈阿波連へ戻る〉そして捕虜になった

一行は阿波連に戻るが、集落は米軍に監視されているので危険で戻れない。そこで、大見座山とは違った山にこもることになり、あらたな山中での避難生活が始まった。依然として食料には難儀を重ね、戦闘も続き、つねにいのちを奪われる恐怖と背中合わせであった。

玉砕場で家族が犠牲となったおばあ（さん）は、字阿波連の山間部に避難してきたとはいえ、落ち着く気配はなかった。人々は昼には山にこもり、米軍の攻撃が止む夜間に行動するのだが、家族を亡くしたおばあ（さん）にとって、それが意味のあることでもない。さまよい、人探しの行動は日中の徘徊となって表れた。そしてついには、米兵に捕らえられた。芋づる式に住民を捕虜にしたい米兵は、そのおばあ（さん）に住民が群れている場所を案内させた。玉砕場で命拾いしたおばあ（さん）は、通訳の米兵を伴って、阿波連の住民が避難生活を送る山林に戻ってきたのである。身を隠している集落の人々のところに案内された米兵は、避難民を説得し、時には高圧的に迫り、山を下りて捕虜になるように観念させた。そして、

一行は捕虜になった。

秀子の証言⑦　阿波連で捕虜になる

筆者「秀子さんもこっちに戻って来たの」

秀子「はい。一人のお婆さんが玉砕して戻って来たお婆さん、自分の娘も親も亡くなってから、あのーお婆さん。戻って来て、ちょっと頭おかしくなってたんです。だから、一人でいつも出たりする人だったから。出ていっている時に、あのー、食料探しに行ったって。したら、外人が来て。はい」

秀子の証言⑧　阿波連で捕虜になる

筆者「阿波連の方は、その時」

筆者「戻って来た人たちは、じゃあ、みんな捕虜になったということ」

秀子「ここに、また住んでいたら。この山に陣地があるから、もう、こっちで、自分たちは、もう、これから、稲も刈りる時期だから、稲を刈りて来て、これを突いて、自分たちで瓶に入れて、突いて、これで、作って、食べたり。また、畑は、自分たちの畑に芋があるのは分かるから、また、芋を掘って来て。あっち（字渡嘉敷）だったら全然ないでしょう、（自分たちの）食料が。自分たちは、あっちに作ってないから。だから、こっち来て、みんなで、ここで食べようということで、みんな一緒に」

筆者「みんな、じゃあ、戻って来たわけですね」

秀子「はい」

……

秀子「ああ、残っただけよ、みんな捕虜になった。でも、もう、みんな、おなかもすいてるし、山暮らしだから、捕虜になってもいいさあと言って、そのままついて行ってる」

しかし、住民にとっても秀子にとっても、捕虜になることは一安心では決してなかった。どのように殺されるのかと想像する第一歩であったのだ。米兵が私たちを連行してどうするのだろうか。秀子は、不安に包まれていた。

秀子の証言⑨　殺されるかもと思った

筆者「騙されているか分かんないけど」

秀子「もう、生きるためには、それが。あのー、歩いて、また裏の、あの山の後ろの、裏の方、あそこまで、みんな、ふらふらしながら歩いて行ったんですよ」

筆者「ああ、そうですか」

秀子らは座間味へと、米軍の舟艇で運ばれた。島の南方のヒナクシの浜まで、歩かされた。舟艇が上陸できる場であったが、栄養不足で衰弱した住民にとって、これも捕虜への虐待にしか思えなかったそうだ。

4.8 初めて話して、語り継ぎたいこと

戦争体験を始めて話したという秀子には、実は、戦争を知らない人に伝えたいことがあった。

秀子の証言⑩　伝えたいこと

筆者「ここで、秀子さんは、こういう、あの、自分の戦争体験について話したり、何か、まとめるというか、機会はあったんですか」

秀子「うーん、あの話（戦争の話）は、もう、誰にしても話さなかった。今、もう、年取ったから、一応」

筆者「すいません」

秀子「これ、これ（戦争のことを）今、来て話すかあって言うから。もう、これで最後かも分からんからって」

秀子の証言⑪　子どもに体験させたくない

筆者「（役場の人などは）公務員の時にはねえ、話しちゃいけないのかと思って（いる人もいますね）」

秀子「まずいと思って話さなかったはず。みんな、こんなして、遠慮して話さないわけよ」

秀子「自分たちのねえ、子どもたちにはねえ、

こんな体験させたくないしねえ。世の中が今のように調子でいけば、自分たちも安心できるけど。やれ、自分たちの孫、子どもが、もう、こんな体験ね、あうと思わんから。亡くなった親たちは、もう、一緒に戦争でやっている人たちだから。自分のね、息子をみんなね、兵隊に行かせて。自分たちも沖縄の（沖縄での体験者）だったけど、すごい親が、うん。激戦地に出て、亡くなったということを阿波連の友達が教えていた（くれた）んですよ。で、健児の塔に埋葬しているよってことを。で、これの、上のお兄さんが海軍」

筆者「ああ、そうですか」

秀子「うん。だから、みんな戦争で亡くなっているんですよ」

……

秀子「ああ、そうですか。親が、あのー、もう体力ある人は、兵隊へ、にいった人たちは、あのー、もう、もう、この頃の自分たちの同級生ったら、親が5、60ぐらいだから、兵隊にいけないから。防衛隊ではあるけど、兵隊にはいけないから、あのー、残っているけど。そんな人たちが死んでんだ。毎日戦争に。うん。アメリカに捕虜にされたら、女の子からいたずらされるから。生き残ったら、大変。だから、早く死ぬのがいい」

……

筆者「捕まるんだったら、死んだ方がいい」

秀子「うん。今考えたら、そう、いー、家に帰されるけど。当時は、もう、アメリカにつかまれたら、女はもう勝手にされて、もうすごい」

筆者「そういう教育を」

秀子「そうしか」

筆者「受けさせられた」

秀子「ああ。そうしか。自分たちには、もう教えられてないから。みんなそんなもんと」

筆者「そんなもんと」

秀子「うん。だんだん、いいのがすー次第、悪いことはなくなっていくはずだけど、その当時はそうしか思わなかった」

……

筆者「悪いとは思わなかった、兵隊が来ても」

秀子「兵隊、うん、守ってくれてるとしか頭にないわけ」

……

筆者「で玉砕しなきゃいけないと思って」

秀子「あのねえ、あのー、特攻隊の人がかわいそうでした」

筆者「ああ、そうですか」

秀子「まあ、17、8の、あのー、志願兵。この人たちが、自分たちと同じように、自分たちも道、木の下で勉強するから、あの人たちも」

筆者「勉強している」

秀子「暇な時は来て、遊んで、話したりしよったからねえ。もう」

5　金城信子

金城（旧姓は新城）信子の家族について述べると、戦争の当時の信子の家族は、祖母、父母と、兄、自分、妹、弟、弟の8人である。沖縄戦の時に、兄は出征して本島にいた。その兄は牛島中将の自害で沖縄戦における組織的戦闘が終わる直前の6月20日に戦死している。摩文仁においてである。お父さんは、42歳で防衛隊に配属された。

島にいた7人は、妹と弟が第二の玉砕場で犠牲となり、そして、避難生活のなかで祖母も亡くなった。家族8人中の4人が戦争の犠牲となった。また、父親は、軍から捜索を受けていた。戦争の途中から、日本軍が怖かったと住民は口々に言う。些細な事情をみつけては、反軍的として処刑することに血道をあげていたといっても過言ではない。一部の兵士や、軍に忠誠を誓うことが生きる途でもあった巡査もそれにならった。信子の父もいわば指名手配のような扱いを受けていたので、信子はその父親をかくまっていた。それも、命がけのことであったに違いない。親戚の者も父を守るのに協力した。そして最終的に、お父さんの命を守ったのである。

5.1 自主的な避難対策、戦争直前

信子の一家は、第一の玉砕場に行ってない。ニシヤマ（北山）へ着くのが遅れたために、たどり着いていない。その背景には、お父さんが軍に防衛隊員として下属して経験した時の、軍の命令への恐怖があったのではないかと、筆者は推測する。

その一方で、女子青年団員として軍に積極的に協力していて信子には、ウンナガーラへの集合命令が出る。巡査からは、多様な命令系統をつかっての、ニシヤマへの集合命令が出された。避難というよりも、集合命令である。それに背くことは、通常はできない。ニシヤマ（北山）への避難は、そのまま自分たちの安全の場の放棄であり、タマ（弾）よけのない島の北部への集結命令でしかなかった。

お父さんの軍命への恐怖は、軍作業の時に受けた大怪我に由来する。米軍からの攻撃を受けた時に、命を落とすほどの恐怖の経験をした。秘密基地での使命は、マルレという特攻艇で連合軍戦艦に特攻攻撃をすることである。防衛隊員の父は、マルレを秘匿する壕堀りをしたり、特攻隊の訓練のためにマルレを浜に下ろしたり、それをまた秘匿壕に格納したりなどの軍務についていた。3月23日から慶良間諸島への爆撃が始まり、艦砲射撃となり、上陸作戦目前となるころお父さんは、マルレを浜へと引出す任務に従事していた。その時に、マルレの作業への爆撃がなされたので、父はその爆風で飛ばされて怪我をした。末端の兵隊や防衛隊員、そして朝鮮人軍夫（軍属）などが、いかに危険な任務を負わされていたかがわかる。

信子の証言①　父の大怪我

筆者「マルレですね。特攻艇」

信子「マルレの、この、防空壕を掘って、防空壕からこう引っ張り出して、人がみんなヨイショ、ヨイショって言うからねえ、浜に降ろしていって、向うから出るあれだったんですよ。で、降ろしたものの、爆弾が落ちたかな、爆風に飛ばされてですね、帽子もなくなって、で、洋服もあちこち焦げて、あなにして（穴ができるほどで）、まったくもう酒飲んだ人が、酔っ払いが歩くようにしてきて（生きて）いたんですよ、2、3日してから」

筆者「それは自分のお父さんはね。防衛隊で」

信子「海のお父さんですよ」

筆者「海のお父さんね。と、特攻艇の手伝いをして」

信子「42（歳）になりよったですよ」

筆者「特攻艇の手伝いをして、大怪我をしたわけね」

信子「ん」

5.2 避難命令〈避難すること、避難の状況〉〈集まりなさいとの指示が女子青年へ〉

十・十空襲を経て住民は、男手が限られている中で、山裾壕を掘り進め、23日の大空襲が続くなかでもその作業を続けた。信子の家は頼みの父親が防衛隊にとられて、また長男が徴兵により出征していたので、島に残されたいちばん上のきょうだいである信子が中心となって、軍作業に従事しながらもその合間をぬって、自分たちの畑がある後背地の山裾壕を掘り進めていて、なんとかそこに避難するめどが立った。

そこに、避難命令が出された。自分たちがつくった避難場所から退くことを命じるニシヤマへの避難・集結命令である。まずは字渡嘉敷の住民を集めるために、ウンナガーラへ集まれである。しかし、23日から続く空襲の結果、山たる山は燃えつくされるように燃えている。日本への攻撃として有効と判断された焼夷弾が使われた。焼き払われ、いまだ火の粉がくすぶっている山を登るというのだから、安全とは思われなかった。

信子の証言②　女子青年に避難命令

信子「山は山みんな。石油ばらまいたのか、山はみんな燃えてですよ。この今山がこんなに木が生えているのは、これがなくなってからまた新しく生えてるって」

筆者「それが続いて、そのーそのー防空壕に避難していましたか。その間毎日」

信子「防空壕に入っていたら」

筆者「空襲の時は、はい」

信子「あのーみんな女子青年は集まんなさいって言って、向うの山のところ（ウンナガーラ）に住民集められたんですよ。たら、みんな一カ所に集まるように村民はみんな一カ所に集まらないといけないよーって言って。やっぱり玉砕させるつもりだったんでしょうねえ」

筆者「その集まんなさいと言ったのは誰なんですか。女子青年団長」

信子「巡査が」

信子の証言③　避難命令に右往左往する様子

巡査によって、また軍の命を受けた防衛隊員によって、ウンナガーラへそしてその先へ、さらにニシヤマへと行くように、何度も何度もうながされた。しかし、信子の一家は、さまよった。米軍の攻撃を恐れたのか、ニシヤマへ行くことが難儀だったのかは、定かではない。

筆者「女子、女子青年団ばっかり集められた」

信子「……ここの山の上ですね。こっちに行きなさいといって言われているわけ。おばあさんたちもおんぶして行ったら、もう艦砲射撃がひどくて、壕、壕を掘りかけるといって、やっているんだけど、つるはしは持ってからねえ。防空壕を掘るといってきてるから、とんでもない。もう艦砲射撃が火になって、もう弾が落ちるもんだから、怖くなってからねえ、向うからまた逃げて、銘々避難場に行っていたみたいなんですよ。うちなんかはお父さんが向うの、あのー、アラリというところの、あのー川があるから、向うに行こうねーと言って、行ったものの。登るっていってしたら、夜が明けて。もう夜も寝れないですよ。もうあちこち行くに（ので）。で、上がろうとしたら、夜が明けたもんだから、大変だと言って、また降りて来て。この、ガテカルというところ」

5.3 避難を何度も督励される〈行かないとーならない〉

住民は、ニシヤマへの避難を命令される。それが何度も何度も繰り返される。従わないことができない。通常では、できないような状況が次々と積み重ねられている。ニシヤマに避難することが安全と思えなくても、精神的な圧迫を受ける。

信子の証言④　ニシヤマへ行くことが督励される1

筆者「うん。また、戻って来たわけ」

信子「またここに避難している人たちは、青年が呼びに来ているんですよ。みんな壕から出て、一カ所に行かんといかんよーと言って。あの時（行ったら玉砕だと）分かっておけば行かないで、銘々の防空壕の中に入っとけば、あんなことはなかったんですよ」

筆者「で、みんなに、そのー各集落に命（命令）が出るのは27日の夕方からですよね」

信子「して、向うのダムのところに避難している人たちはもう先になって行ってですね。うちなんかはここから出て、この山の後ろ側から、道から行って、夜だから、向う、ウンナガーラに、というところだけど」

筆者「ウンナガーラに。はいはい」

信子「向うに着いたら、もうここの（地区の）人々はいないんですよ。もう上がっていって、あのー本部の近くの、クビィと言って、ですね」

筆者「クビィ」

信子の証言⑤　ニシヤマへ行くことが督励される2

信子「で、ようやく、ウンナガーラというところに着いた時点に、向うの人たちも上に上がってるってて、また青年が呼びに来て。みんなこっちからねえ、向うに上がらんといかんよーと言って。クビィというところに上がっていって、……」

信子「ここ歩いている人がですね。……この人が呼びに来ていた」

信子「みんな集まらんといかんよーって言って

からね。して、あれから上に上がって行って、クビィと言うところに着いたら、またそこにもいない。もう前の人々がですね。もう玉砕場に行っているんですよ」

筆者「で、その時信子さんは誰と一緒だったかって言えますか」

信子「家族は、おばあさんは私がおんぶしているもんだから、そんなに歩けない。（自分は）じゅうごう、じゅうごうが（15歳に）なりよったから」

5.4 遅れて集結したが〈お父さん捕縄される〉

ニシヤマ（北山）に到達したものの、お父さんは捕縛された。第一の玉砕に間に合わなかったから、防衛隊なのにということなのだろうか。帽子をかぶってカムフラージュしていて、あやしい、ということらしい。縛られ、しかし、隊長と知己であるので温情的に説諭され、新たな軍命を授かった。海岸の近くにある米軍から爆撃を受けた食糧庫から、食料として有用なものを見いだし、赤松隊の新本部まで運んでこいということである。こうした任務は、朝鮮人軍夫（軍属）などが就かされていた。

玉砕場への到着が遅れたことで処分を受けたことから、避難命令、ニシヤマ集結がいかに強硬な至上命題であったかがうかがえる。そして、ニシヤマへの集結がそこで起こった集団自決とセットのようなものであったことがうかがえるのである。

父が赤松隊長からの取り調べを受けている時に、防衛隊員の一人が斬殺の処刑を受けた。そこで、次は自分がという恐怖が最高潮に達したのである。

信子の証言⑥　取り調べの恐怖〈友軍によって住民が斬られる〉

信子「どこがどういうふうにって、島じゅう全部。船は徴用されて、船長、機関長と、船ともろともですよ。で、みんな、あのー分かっているもんだから、赤松隊長もまたあのーこの海のあれを分からんといけないと言って、聞いたらしいですよ。で、よくも分かっているわけ、イカ時（イカの漁期に）なったら、イカを採って。そん時までは、（徴兵前の）兄さんもいたから、……24匹ずつイカとって来よったんですよ。たら、これも（赤松隊長に）あげて。して、よく分かっているわけなんですよ。したもんだから、ああ、新城（アラシロ）さんって言うんですよ。気でも狂ったんですかと言って。言いおったらしいんですよ。そしたら、その時に（防衛隊員の一人が、：筆者の他の聴き取りによれば、家族が集団自決で全滅したせいで）気が狂ったからね、高い木に上がってからね、天皇陛下万歳して、大きな声出して、やったもんだから。この人一人には、赤松隊長（が処刑の）命令したみたい」

5.5 生き延びて、その引き換えに危険な任務に就かされる

危険な軍務を命令されたものの、またもや米軍の攻撃により恐怖を経験し、任務を負った荷役の一団は散り散りになった。お父さんも逃げた。そのことが、父を軍の捜索対象とすることへとつながった。

信子の証言⑦　取り調べの恐怖、処刑をまぬかれる

信子「知っていてるんだから。で、気でも狂ったんですかと言って。あのーおなか縛っていたんですよね。逃げないようにして。で、その赤松隊長の防空壕はお父さんが削りかけたもんだし、ですよ。で、夜じゅうあれして、もう暁になったから、あのー食料場に行って、あのー食料取ってきなさいと言って、言いつけられたもんだから、30名ぐらい、軍夫も防衛隊も、あのー兵隊もしてからね。30名ぐらい（港付近の食料庫に）降ろされて（作業を）しているんですよ。あのーもう。して、行って、……、向うに出て行ったら、もう夜は明けて、アメリカは

もう入り込んで、しゅうたい（舟艇）から来て、入り込んでいるみたいなんですよ。これを見てから、敵だーと言って。もう夜が明けているから、行かれないわけですよね。帰りは今来た道は分かるでしょう。みんな回れ右して歩きなさいと言ったら、もう兵隊が、（敵だーとか）言ったらしいんですよ。お父さんビックリしてからね。敵だーと言って。一番後ろですよ。行く時には一番前だから。で、先頭になって行きなさいだったから。で、回れ右しなさいして、歩きなさいと言って、しているんだけど。もうあれからは自分も（お父さん自身も）気が狂っていたんでしょうねえ。で、一番最後になっているのが、敵だーと言って、大きな声出したから。その時にみんなちりぢりばらばらになっているみたいですよ。……」

5.6 第二の玉砕場で、弟が

お父さんが危険な軍務を命じられるなか、その他の家族は第二の玉砕場へ行くように命じられた。そこで、家族は戦争の犠牲となった。いったい、誰が家族を死に追いやったというのだろうか。

信子の証言⑧　弟が犠牲となる

信子「（赤松隊本部で）怒られてからですね。また、こっちから別に行きました」
筆者「第二の玉砕場に行きましたよね」
信子「第二の玉砕場なんですよ」
筆者「に行って、信子さんも妹、弟と、お母さんと一緒に行った」
信子「はい」
筆者「第二のね」
信子「で」
筆者「第二の玉砕場には」
信子「次男は私がおんぶして。もう、降ろして、こっちもう、こっちに避難とか行けないと言って、降ろしてからねえ、座るのと同時に弾に当たっているんですよ」
筆者「ああ」
信子「これはもうアメリカが撃ったのか、日本軍が撃ったのか分からないけどね。迫撃砲といって言ってましたけどね」
筆者「で、次男は亡くなっているわけですか。それで」
信子「ん」
筆者「次男さんは亡くなっている」
信子「亡くなっているんだ、もー。顔は見られなくて。もう割れているですよ。こっちゃよう。これ見た時にはもう。どうしても見れない。毛布を被せて」
筆者「毛布を被せて」
信子「もう。あの時のことを思い出したらもう本当に泣かないときかないんですわ。お父さんもいないもんだから、自分たち側も行方不明といってしておったんですよ。だからもう、これらが亡くなって、妹も亡くなっていると思ったら、4時間ぐらいしてから、出て来ているんですよ」

弟が第二の場で犠牲となった。そして、大怪我をした妹をおんぶすることになった。いろいろな命の犠牲の渦中で、信子が一家の命をつなぐ支えとなっていたのである。

信子の証言⑨　弟を弔う

筆者「自分一人で兄弟を弔わなきゃいけないと」
信子「もう本当に。お母さんは一番末っ子抱っこして、やっているもんだから。この次男の、次男がですね、おんぶで。兵隊のところの本部で乾パンと鰹節なんかとを交換してからね。あのー、乾パンたてて（もらって）来るんですね。もう水も綺麗のか（なのか）悪いのか分からん。そこの水を飲んだらしくて。姉さん自分も歩けないから、おんぶしてって言うから、・…かわいそうに思って私がおんぶしているんです。で、次の第二の避難場。まあ、あの青年の家の。向う見ましたか、青年の家」

筆者「一度。はいはいはい」
信子「炊事場がありますでしょう」
筆者「うん、はいはい」
信子「すぐそこの、そこ第二の避難場だったんです。で、向うでも、私の背中から降ろして、弟を前に座らせているんですよ。こんな座ったかねえ」
筆者「信子さんがおんぶして、えーと」
信子「おんぶしてからね」
筆者「で、次男を連れて」
信子「おんぶ。自分が持っている食料は捨てて、これおんぶしているんですよ。……あのーみんなこっちで防衛隊がまた手りゅう弾投げるって、あれしたもんだから、怖かったからね、ずーっと上の方に行っても、（ともすけが）いないわけ。もう、ともすけと言ったから、ともすけって呼んでから、人の上から、もうずっと上に行ったから、向うに行った（行っていた）わけですよ。捕まえて来て、お母さんの帯を解いてからね、通帳から写真からふところにいれていたらしんですよ。たら、もうお母さんの帯で私が先頭になって、お父さんが防衛隊ですからね」

信子の証言⑩　弟と妹が被弾した弾はどこから、妹のキズはみてもらえない

〈民間のくるところではない〉
信子「弾が当たって」
筆者「誰の弾なのかってことですよね」
信子「次男はもう見れなくて、片づけて。毛布で。二度とは見にきれなかったから」
……
信子「で、これは片づけてから、座っていたら、妹がまた出てきているんですよ、これもいないと言って。木の葉を取って、被せていたんですけどね。これが出て来たもんだから。ちょうど、もう、あれは体格もよかったし、私よりかは、かえって大きい方だったから、また、これおんぶして。本部に行って、治療させてから、……避難壕に行きなさいと言って、言われてたんですよ。たら、本部に行ったら、もう太刀（剣）を持っとって、振り回されてですね。こっちに何カ所か怪我してんのが、あのー、みんな一緒に行ったんですよ。たら」
筆者「普通の人（も）怪我しているから何とかしてくれって」
信子「もう、ここは民間が来るのじゃないといって」
筆者「民間が来るのじゃないと」
信子「言うもんだから。自分たちは、こう怪我してるのを治療してから帰りなさいといって言われてるから、あのー治療させるんですよーと言ったら。あかん、あかん、いかないと言って、民間はこっちに絶対入っていかないと言って。もう太刀をこうやるもんだから、もう怖くてですね」
筆者「怖くて、もう近寄れない」
信子「で、あれからもう戻って来て、亡くなっている人たちのところに座っていたです、1日日中。したら、もう、あれからは、本当に血がみんな出ているでしょう。だからもう血のくされが、匂いが、（しかし、何ももう）できなくてもう。おなかももうこうあれするしねえ。この匂いで。だってもう、もう、自分の身内が、兄弟がいなくなっているのに、我慢してこっちに、1日中おったんですよ。たら、妹もまたおんぶして、ど、どうしておんぶしたのか分からないんですよ。おんぶしたらもう足は地面からこうあれする（着いてしまう）んですよ。して、これもおんぶして、私もきついもんだから、大きいもんだから、きつくて」
筆者「妹の体格がね」

5.7 その後、行く先々で追われて〈ツツンジャーラからどこへ〉

そして、妹が亡くなる。重傷を負った妹をおんぶしての、彷徨がはじまる。しかし、誰も助けてくれない。住民によその人を助ける余裕はまった

くなかった。信子は、悲嘆にくれて、重傷で死にかけた妹と一緒に泣くしかなかった。なんで生きているのか、絶望としかいいようがなかった。

信子の証言⑪　妹が死ぬ前に、お父さんに会わせたかったが

筆者「はい。ツツンジャーラというところに行って」

信子「今もあるんじゃないかな。そこに降りて行ったのはもう。途中でまた軍夫、軍夫がやった（軍夫がいた）みたいだけど。アメリカと思って自分たちが言葉が分からんでしょう。朝鮮語も分からないし、アメリカ語も分からないもんだから。もうまたやられるのだねーと思って。やって（そのまま進んで）。妹ももう痛いと言って泣くし、私ももうこれくらいしてんのおんぶしているもんだから、私も一緒に泣いて」

筆者「うん、自分も泣いて」

信子「もう死んだ方がよかったねーと言って。二人大きな声を出して泣いて」

信子の証言⑫　行く先々で追われて〈出ていきなさい〉〈誰とも交代できない〉

信子「避難場がこっちにあったわけですよ。で、そこに降りて行って、みんな行っているぐらい。ここに行ったら、もうここの主が、あのー食料採りに行っていたみたいで、帰って来てから、ここから今出て行きなさいと言って。同じ住民ですけどね。ここは自分なんかのうちだから、あんた方は出て行きなさいと言ってからね。出て行って」

信子「交代する（妹のおんぶを誰かに代わる）、交代することもできなかったんですよ」

筆者「できなかったね」

信子「お母さんもこれを（小さい子）抱いているもんだから。おっぱい、おっぱい、おっぱい飲みよったもんだから。おっぱい離したら泣くもんだから……」

5.8 妹の久子が死ぬ前にお父さんに会わせたかったが、亡骸に手を合わせて

信子は、お父さんが生きているとの情報を得て、瀕死の状態にまで危機が迫っていた妹の久子が生きているうちに、お父さんに会わせてあげたかった。

信子の証言⑬　久子をおとうさんに見せたかった

信子「……女子青年が、あのー幹部でしたけどねえ、あの姉さんたちが降りて来てから、あんた方こっちにいたのーって言うから、はいと言ったら、あんたたちお父さん元気よー、自分なんかの防空壕にいたよーって言うんですよ。もうあれから、生きているんだねーと思って。もうお父さんがいるのに、もう心配ないねーと思って。して、こっちで、もう、妹はもうこっちから血も出るし、蛆も歩くんですよ、蛆まで出て、したもんだから、こっちで10日はいてですね。あのーお父さんが生きてると聞いたもんだから、あのー今は自分の避難小屋に行っているよーと言ったもんだから、これが生きている間に、お父さんに見せないといけないと言ってからねえ、おんぶして、下の方に降りて行ったらですねえ。こっちに下、兵隊が立っているんですよ。うちのすぐ隣の、あのー向うにいた兵隊が、こっち、カドヤといって言ってましたけどね。あのーカドヤさん元気ですかー、あんた方も元気だったーって、……言いおったんですよ」

信子「たら、どこに行くんやーって。したら、自分の避難小屋に行かないとね、こっちでは飯もないしね、あのー食べるのがなかったら死ぬんだから、あのーこう妹が生きている間に向うにお父さんに見せに連れて行くさーって言ったら。あかん、あかん、今ね、アメリカが入り込んでるからね、行かれないよーって言って、言われたもんだから。で、引っ返して、来る時ですね、あのー途中から、このー妹

がひきつけはじまっているんですよ。あそこうなって、ひきつけしたもんだから、もう歯は開かないです。口は開かないさねえ。あのーひきつけたら。一緒にいてからね、妹たちのところに行って、あのーお父さんたちの妹たちのところに行って」

信子「向うにおったら（ここにおったら）、もう食べるご飯もないし、どうしたらいいかねえと言って、考えて、したら、これがもうあんまりひきつけひどくなってきたもんだから、おしまいなもの言いながら、亡くなっているんですよ」

筆者「妹がね」

信子「胸はもう焼けるようになったんですよねえ。あのーおばさんも、父の母がいて、水飲ましてくれーと言って、自分が治ってきたら、おばさんたちの孝行もするから、あのー歯をあけてちょうだいといって言うんですよ。だけども、もうこの歯はもう全然開かないと言って。向うから来て10日はいたんですよ。10日で亡くなって、4月の8日に亡くなっているんですよ」

筆者「妹がね」

信子「10日間は生きていた」

筆者「その間……もう本当に飲まず食わずの状態で、おんぶしていたわけね」

信子「整理して、埋めて、もう避難小屋に戻ったらもう大雨が降って、余計もうこれが前にいったからね。雨に濡れているかーと言って、もうこっちで泣いて。お母さんも二人、こっちでもう、かわいそうで、埋めてすぐ戻ると、じきに大雨が降ったもんだから。そんで、きつくして、どうしたら治るかねえって言って、（父の）妹のおばさんの旦那が、あのー内地の方でしたけどね」

信子「……自分たちも、これが花もそえてから。もうおばさんたちもここにいるからねえ、心配しないでねーっと言ったからね。手合わせて」

信子は、お父さんに会わせることなく亡くなってしまった久子の亡骸に手を合わせて、花をそえてその悲しみにくれるしかなかった。

5.9 巡査が捜索するお父さんをかくまう

お父さんは軍に背いたとして、駐在の巡査は、執拗に父を探している。いったい、軍やこの巡査は、何と戦っているのだろうか。住民は、いつしか軍に恐怖を覚え、できるだけ接触をさけるようになった。

<u>信子の証言⑭　父をかくまう</u>

信子「お父さん、して、もう日本の兵隊に見られたら、クビ（首を斬られる）だから」

筆者「ああ、そうか、家族のところに行っちゃいけないのね」

信子「見られないように」

筆者「見られないように」

信子「で、隠れて、しているから。駐在が毎日来ていることを誰かから聞いた。毎日通っているんですよ」

〈お父さんを隠す〉

筆者「避難小屋が」

信子「だけど、お父さんが銘々、あのー蘇鉄も切ってね、銘々あのーあれしなさいと言ってからね。部屋をこう区切っているんですよ。アパートみたいにして。てからもう、兵隊がどっから入って来るか分からないからと言って、小屋のですね、片一方に、あのー穴掘ってからですね。で、こっちの下、床、床いれてからね。ござと。あれ、上の方はまた息できるようにして、竹を編んでですね、そこに隠していたんですよ。（8月の中旬に村民が一団となって山を）降りて来るまで」

……

信子「8月14日に降りて来てますからねえ。降りて来たらもう天皇陛下の8月15日の停戦なったよーって。あれが、あのー放送が流れていたんですよ。その間も日本軍に見られたら大変と言ってですね。どこにも行かない。自分一人がもう畑

行って、芋掘って来たり、そんなにしよったもんだから、もう私は死なしたら大変だからと言って、お父さんは民間の姿してからねえ、着物来て、して、夜ずつ一緒に芋掘りに。向う山の裏側、座間味が見えるところの、向うにあのー畑していたもんだから、向うに行って、芋取って来て。夜からもう、夜は兵隊は歩かないから、こういうふうにして、やって。もう降りて来るまで、本当に軍が怖かったんですよ」

筆者「降りて来るまでというのは、降伏するまで」

信子「お父さんがあんなにしない前は、この兵隊ともよく知り合って、あのー仲良くしていたんですけどねえ。もう避難してから、こっちでは自分のことは絶対言わないよーと言って、お父さんに口止めされたからね」

5.10　家族を思い琉歌　家族を思うたびに涙する（琉歌）

弟をなくし、妹をなくし、祖母を亡くし、そして、出征した兄が戦死したと知り、戦争で多くの家族が犠牲となり、その悲しみにくれる信子は、その心情を琉歌で表すようになった。

信子の証言⑮　弔う、琉歌〈弟：友三郎よ、妹：久子よ〉

信子「いくさゆのあわりわしてわしらりみ、あさゆおもかじやまさちたつさ」

信子「ちぶみうるはなやさかなそて、ちょうれいぐあ、いくさゆのはなとちりちいつさ。いくさ、つぼんでいる花は咲かないで、いくさゆの花と散りて、切れていくと言っているわけ」

信子「あんた、これどこから考えたかと。自然にね、自然に出て来る、戦争当たっている人はねえ、もう自然にこういうあれ（琉歌）は出て来ますよーと言って。珍しくしてからね、書きよったんですよ。は、は」

信子「咲かないで、もう、そうでしょう、もう20歳、兄さんが20歳で」

筆者「子どもがね」

信子「妹が14歳」

筆者「まだ、まだ、つぼみ」

信子「弟が10歳だから、つぼんでいる花でしょう」

筆者「つぼんでいる。これから人生は、これからという時に終わっちゃっている」

信子「そうそう」

……

筆者「6月20日に、どこ、場所は」

信子「摩文仁本営といっていうから」

5.11　この戦争で目撃した数々の犠牲と向き合う

信子は、家族の死ばかりでなく、数々の死を目撃してきた。生命を軽んじられた背景には、強烈な差別があるとも思ったのである。

5.11.1　戦死というよりは死なされた日本兵士のこと

信子の証言⑯　万歳攻撃を命じられた日本兵のこと

信子「この○○という人にですね」

筆者「これは兵士」

信子「民間のね、芋盗んで、食べたらしいんですよ。だから民間ももう精一杯でしょう、あのー芋取るのは。敵の弾も来るし。して」

筆者「○○と言う人は処刑されたの」

信子「この人も民間の、芋盗んで食べているみたい」

筆者「でも、大丈夫（でしたか）」

信子「これを（軍が）聞いたんでしょうねえ、だから、A高地陣地（米軍の陣地）といって、そこのところ、青年の家からまっすぐのところ。向うに行ってからねえ（向うのほうに）、敵の陣地があるんですよ。こっち（この敵の陣地）に斬り込みにやらされているわけ」

筆者「まあ斬込みに行かされるということはもう死ぬということですねえ」

信子「もう絶対忘れられないですねえ」

5.11.2 朝鮮人軍夫への差別

信子の証言⑰　朝鮮人軍夫

信子「（親戚の）兄さんなんかは、またあのー、木炭釜の、あのー向うに高木切り出しに行っていたみたい。たら、軍夫が来てからですねえ、あのー芋の皮下さいと言って、言いよったって。たら、何するねー、芋の皮何するねーと言ったら、食べると言って、食べるからーと言ったからよ。こんなものは食べられないと言って、自分が持っている、籠に一杯持っているお芋出して、あげて。したら、うちに来て、この話しているんですよ、お母さんに。たら、お母さんはもう涙はさき、もうあんたたちも戦争（戦地）に行ったらこんなにするのかねーと言ってよ、泣いたら、自分たちがあんなことはしないよーと言って。そう言って、言いました。本当にかわいそうでしたよ。差つけてですね」

6　3人の証言から

3人の証言を総合的に考えると、家族ごとに、親族間で、米軍の攻撃への備えをしていたところ、ニシヤマへの集結命令が出たことにより、多くの住民が犠牲となった。深刻な犠牲を産んだ根本的な要因はこの避難である。避難命令とは言うものの、その内実は住民の住民による自立避難をひきはがす命令であった。玉砕場での集団死は、捕虜になってはいけないと厳命され、敵に捕らえられると、どのような残忍な仕打ちをされるかということが叩き込まれていたからである。島の住民は避難していた場所を追われ、不安と恐怖を高めた住民は、村長の万歳や、周囲の動向を契機に、渡されていた手りゅう弾を爆発させるなどして、集団死をした。しかし、玉砕の第二の場では、集団自決をするのとは別に、日本兵からの攻撃により、犠牲者が増えた。軍による殺人である。そのうえに、住民や朝鮮人軍夫、伊江村民への各種処刑や、山中での餓死、傷病死も起きている。渡嘉敷村の兵事主任新城真順（戦後の姓は富山）の残した文書によれば、軍が一番恐れていたのは住民が捕虜になることであったという。軍は住民が捕虜にならないようにと、ニシヤマ（北山）への避難という強硬な命令を下したのである。自己防御の条件をはく奪された住民は絶望を背景とした集団死の条件を意図的に作られたといえる。

住民はそれぞれに戦況に応じて自主的に避難していた。そこへ避難命令が出たことがすべての犠牲の端緒である。戦争犠牲死の進行は多様で、時間差も少なくなかった。

第一の玉砕では、集団自決（強制集団死）が起きた。そこでは、自決の契機がつくられた。第一の自決のあとに着いたグループは、軍から厳しいとがめをうけ、第二の玉砕場での集団自決（強制集団死）が求められたケースもみられた。第二の場では、日本軍の擲弾筒も発射された。住民にとっては友軍による組織的な殺人である。

渡嘉敷島における住民の多様な犠牲死は、米軍の上陸作戦の開始以後に、日本軍から命じられた、島のほぼ北端の山の谷側である「ニシヤマ（北山）への集結」命令に具体的に端を発している。この命令に連動する形で、①島の幹部による象徴的な行動により、手りゅう弾や刀・カマ・棒・ツル・ひも等を用いた集団死が実行された、というのが主な流れである。3人の証言からえられる具体的な犠牲死を分類すると、①に加えて、②日本兵による発砲や擲弾筒による集団殺害や、③過酷な状況で山間部へ集結することを強いられたことによる関連死（高齢者や乳幼児・障がい者が受けた保護環境の喪失、軒のない状態、栄養の欠如や疾病や孤立等、さらには悲劇的な場面に直面するなど、心身の困難な状況がもたらす死）、④スパイという嫌疑をかけられた処刑が、みられたのである。また、朝鮮人軍夫に対する差別的な扱いによる処刑や、日本兵の間で起きた殺人事件なども発生しているのである。

本論では、渡嘉敷島における死は多様な犠牲死という観点から一様ではないことを考察し、またそこには、命じる者と命じられる者との天と地ほどの差異がみられることを明らかにしようとした。3月23日の島での開戦と共に急浮上したのは、生命の存続において下位に置かれた者に対して、生を消滅させるほどの歴史的な悲劇がもたら

表 1　3 人が経験した戦争と犠牲死

月日の進行	小嶺正雄が経験した戦争と犠牲死	金城信子が経験した戦争と犠牲死	金城秀子が経験した戦争と犠牲死
～ 3 月 27 日	自主的に避難していた	自主的に避難していた	自主的に避難していた
3 月 27 日～ 終結を命じられた 悪路、苦難、ネグレクト	命じられたとおりに	遅い歩み、行くことへの躊躇	遅い歩み、行くことで起こることを予測
3 月 27 日 28 日 自決場へ	第一の自決場（玉砕場）で、親戚等の死、たくさんの死に直面。第二の玉砕場でも死をうながされた	第二の自決場（玉砕場）で、弟の死、妹の死	第二の自決場（玉砕場）へ、しかし自決を断念
3 月 27 日～ さまようなかで	祖母の死	処刑の対象となる危機を迎えた父	血の水を飲む。あとで、自決場でのたくさんの死を知る。家族を亡くしたおばあさんがさまよい捕虜に
山に避難中に（1）	同級生が処刑、朝鮮人軍夫が処刑	父親の捜索が続く、処刑の危機。突撃を命じられた兵隊の死	山での避難生活のなかで、自決場の惨状を聞く
山に避難中に（2）	軍の投降の直前、部下の兵士は上官を殺害	出征の兄は摩文仁で戦死	
第二の自決場（玉砕場）での特記事項	第二の玉砕場では擲弾筒が発射された	第二の玉砕場での弾は日本兵のほうから飛んできた	

されたのである。こうした歴史的な事実を決して忘れてはならず、戦争による犠牲死を防ぐためにはどうしたらよいかという、災害研究が不可欠である。

参考文献

海上挺進第三戦隊，1945，『陣中日誌』（辻版）.

海上挺身第三戦隊，1970，『陣中日誌』（谷本版）.

麦倉哲，2019，「犠牲者を忘れ去る国家に本当の復興はない、戦災も震災も ――岩手県大槌町と沖縄県渡嘉敷村での調査から」『日本の科学者』54（11）：616-621.

麦倉哲，2020，「戦争の社会病理 ――日本兵によって処刑された沖縄県民」『岩手大学教育学部研究年報』（79）：109-123.

麦倉哲，2021，「戦争の社会病理 ――日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫」『沖縄法政研究』（23）：1-27.

麦倉哲，2022，「戦争の社会病理 3 ――渡嘉敷島で処刑された 6 名の伊江村民」『岩手大学文化論叢』第 11 輯：67-88.

沖縄県教育委員会編，1974，『沖縄県史第 10 巻　各論編 9 沖縄戦記録 2』.

沖縄県教育委員会編，2018，『沖縄県史各論編第 6 巻　沖縄戦』.

渡嘉敷村，発行年不詳，『沖縄戦記（座間味村渡嘉敷村戦況報告書）』.

渡嘉敷村遺族会編，1953，『慶良間列島渡嘉敷島の戦斗概要』.

Examining War Disaster Fatalities: Insights Obtained from Interview Surveys of Residents of Tokashiki Village, Okinawa Prefecture

Mugikura Tetsu

Abstract:

This study considers war dead as victims of war-induced disasters. Compared to fatali-ties resulting from other natural disasters, these deaths are the most human-driven dis-aster fatalities. In Tokashiki Village, Okinawa Prefecture, approximately 600 people died in the Fifteen-Year War, which encompassed the Pacific War, including 332 people who committed mass suicide (forced collective death). This paper focuses on the testimonies of three in-dividuals, who were interviewed relatively early in the author's process of interviewing approximately 100 people to date, to examine how the residents were sacrificed and how mass suicide (forced collective death) in particular was carried out. The testimonies of these three individuals clearly demonstrate the disparities in life preservation during the war and that the war did not impose equal suffering on all people.

Keywords:

war disaster, disaster fatality, examination of death, mass suicide (forced collective death), disparity in life preservation